百年史刊行を終えて

編纂委員長
金丸 英子

今年５月、『西南学院百年史』が刊行された。本学着任直後より編纂作業に関わることになったので、今日までの私の西南での日々は百年史刊行と共にあったと言っても過言ではない。その間、準備段階からリーダーシップを取ってこられた寺園喜基先生、小林洋一先生が定年退職で退かれた。加えて、年史刊行に関して学内でいち早く声を上げ、精力的に学院に働きかけて来られた塩野和夫先生が健康上の理由から編纂の責任から外れることになった。その後を受けて小林先生が編纂委員長を引き受けられ、ご退職後は私がその任を引き受けることになった。「青天の霹靂」のように降って湧いたことであり、編纂委員会をはじめ関係諸氏は、内心不安に思われたことだろう。経験もリーダーシップもないので、誠実に努める以外に責任を全うする道はなかったが、事務局の方々はそのような者をよく支え、忍耐を持って仕事を進め、刊行に漕ぎ着けて下さった。その間、編纂委員の交代、事務スタッフの退職、編纂作業の遅れなど、振り返ってみれば時々にそれなりの試練はあったが、それでも大幅に遅れることなく刊行できたことは感謝であった。

「編纂委員長」と言えば、年史完成に向け、本務のかたわら粉骨砕身、先頭に立って精力的に全体を牽引したかのような印象を与えるかもしれない。しかし、実質的な編纂作業は、監修委員会諸氏と篠田・高松両氏の献身的な働きにその殆どを負っている。特に監修委員長の小林洋一先生は、傍からサポートする姿勢を堅持され、事務担当者を始めとする関係者に時機を得たアドヴァイスして助けて下さった。私の「編纂委員長職」は、このような多くの方々の支えの上に辛うじて成り立っていたことは周知の事実である。

この百年史は、保育所から大学院、事務局に至る学院各部署からなる「オール西南」で臨んだ一大プロジェクトであった。このやり方を採択した理由は、『七十年史』の反省もさることながら、それ以上に、学院に連なる人々が100年に渡る西南学院の歴史を「私（たち）の歴史」として捉えて頂きたいとの願いがあったからでもある。確かに、これによって眩暈のするような煩雑な作業が膨れあがった事実は否めない。しかし、私はこの編纂理念を誇りに思っている。各校・各部署の執筆者は執筆依頼を

断ることなく、忙しい本務の合間を縫って原稿を執筆し、期日までにご提出いただき、その後の校正のやり取りにも快く応じて下さった。このような協力を賜ったことについては、すでに機会ある毎に謝意を表してきたが、何度そうしても足りない。当然、内外から年史に対するご指摘・ご批判はあることと思う。それには謙虚に耳を傾けたい。が、学院への熱い思いに裏打ちされたこの「オール西南」態勢は胸を張って誇りたい。

特記すべきもう一つの重要なことは、西南学院が学院創立100周年を迎えるにあたり、百年史刊行と並んで「西南学院創立百周年に当たっての平和宣言 ― 西南学院の戦争責任・戦後責任の告白を踏まえて ―」の宣言文作成と公表を決意したことである。この歴史的プロジェクトに編纂委員会は関わることを許され、私自身も委員会を代表して公表に名を連ねる光栄に与った。この意味はとても大きい。「建学の精神」は私立学校の魂である。私たちには、創立者C.K.ドージャーの遺訓「西南よ、キリストに忠実なれ」を学院の魂として尊重し、その精神を掲げ続けることが求められ、またそのように期待されているはずである。百年史の編纂理念の基も、実にこの建学の精神にあった。

いつの日か、私たちの誰もが学院から姿を消す時が来る。世の歴史も学院の歴史も流れてゆく。その中で、西南学院に与えられた使命を確認する基点が建学の精神であり続けることを強く願う者である。その時、この百年史がささやかながらでもお役に立てるとすれば、この歴史的なプロジェクトに関わった者としてそれ以上の喜びはない。